10, Dec, '70.
No-100. 103
Ed: Kou MUKAI Jap.
354 Kameyamama, HIMEJI
イオム通信
昭和45年12月10日号
姫路市かめ山354 Tel 0792-35-2368
イオム同盟 向井孝

自由連合への旅 6 ―完―

この、いささかカッコイイ標題〉を、大上段にふりかざしたオカゲで、本物の旅は八月上旬、とっくの昔上終ってるのに、紙上ではチチとしてすすまない。とうとう、帰りつかずに本号で行き倒れることとなった。

☮ 7.29. キブツの集りで

『しかしながら』と『それだからこそ』と

集会などで、討論をつなぐのに、この二つの型があるようだ。〈弁証法的〉と〈帰納法的〉と云えるかもしれない。

だが、よく前後の関連や、あとへつづくことばをみてみると、ナント、ほとんどかわりがないのである。

だが、そのいずれかを頻用することによって、論理の展開は、しだいに大きくちがってくる！

云いかえれば、前者は、相手の論理を、したがって自己の論理との関係を、断ち切ろうとする指向、姿勢からでている。

後者は、相手との関係を、さらにつくり出そうとする姿勢ー方向において語られている。

このことは、集会で発言するとき、より強く意識化されていなければならないだろう。

集会を創り出す〈イオム79号参照〉というときの、ひとつの重要な視点であり、姿勢として、〈それだからこそ〉を、うまく使いこなすトレーニングが大切だ。

☆ キブツ内でしゃべったこと。〈関係ー第一回ー連合〉〈共同体〉〈前ページの意味〉〈集会のもちかた〉などについて。ここでは、全部かきされない。中途半端で、中止デス。

☮ 7.28. 大門一樹さんと。

大門一樹さんから電話があって、十数年ぶりに出逢う。彼の近著〈盗奪の論理〉は、ぼくにとって、また新しい市民運動にとって、大きな啓示だった。ブルードンが日本で、このごろはじめて評価されだしているとき、財産は盗みだ、というブルードンの経済学に、きわめて実証的に、現代的視点をあたらしく与え、さらに発展させている点で、注目すべき〈他に存在をみない〉学者だと云える。

大門さんの云う〈消費点〉は、ぼくが暴力論ノートの〈生活点〉と重なる意味のものである。今年、いろんな意味で、運動への助力へ時には誹謗などへひっぱり出す〉をたのんだ。

☮ 11月23日よるおそく、何となく心がさわぐのをおさえて、砂川を訪ねた。まつくらの闇だった。青年の家は空家になっていた。反戦ザン壕は、黒い洞穴だった。 ― 誰ひとりいない。…

☮ 死によってしか示しえないもの、死なねばはつきりとしないものがある。三島の死だけでなく、どのような死にも。それゆえ、死は論評をゆるさぬ。死はぼくにとって、いま威厳である。〈11月26日〉

☮ 7.29. キブツの集りで

『しかしながら』と『それだからこそ』と

集会などで、討論をつなぐのに、この二つの型があるようだ。〈弁証法的〉と〈帰納法的〉と云えるかもしれない。

だが、よく前後の関連や、あとへつづくことばをみてみると、ナント、ほとんどかわりがないのである。

だが、そのいずれかを頻用することによって、論理の展開は、しだいに大きくちがってくる！

云いかえれば、前者は、相手の論理を、したがって自己の論理との関係を、断ち切ろうとする指向、姿勢からでている。

後者は、相手との関係を、さらにつくり出そうとする姿勢ー方向において語られている。

このことは、集会で発言するとき、より強く意識化されていなければならないだろう。

集会を創り出す〈イオム79号参照〉というときの、ひとつの重要な視点であり、姿勢として、〈それだからこそ〉を、うまく使いこなすトレーニングが大切だ。

☆ キブツ内でしゃべったこと。〈関係ー第一回ー連合〉〈共同体〉〈前ページの意味〉〈集会のもちかた〉などについて。ここでは、全部かきされない。中途半端で、中止デス。

☮ 7.28. 大門一樹さんと。

大門一樹さんから電話があって、十数年ぶりに出逢う。彼の近著〈盗奪の論理〉は、ぼくにとって、また新しい市民運動にとって、大きな啓示だった。ブルードンが日本で、このごろはじめて評価されだしているとき、財産は盗みだ、というブルードンの経済学に、きわめて実証的に、現代的視点をあたらしく与え、さらに発展させている点で、注目すべき〈他に存在をみない〉学者だと云える。

大門さんの云う〈消費点〉は、ぼくが暴力論ノートの〈生活点〉と重なる意味のものである。今年、いろんな意味で、運動への助力へ時には誹謗などへひっぱり出す〉をたのんだ。

☮ 7.29. 和歌山から転任して、康島で住金建設工事K鉄工の所長とかをやっているK.Kさんを訪問（夜は春燈流の俳人だが、それよりもぼくの30年来のアンビ友達）すばらしい空と大陽と水と土。松林とゴは、人も住まない、車で30分のはしっても終らない砂丘をきりひらいて、和歌山の家を一週間、留守にしてこちらへきている間に、五年間大切に飼っていた金魚が、みんな死んでいた。水面におちたススなどの毒で死んだのだろう。こうなる。一パイのみながらきいた金魚の死。

公害一掃
主婦一掃

ゴミ君たちの
間で何故、話合いがおこらないのか！

『盗奪』ノート。（未完）

山鹿泰治さん死す!!

70年12月6日午前5時・山鹿さんは亡くなられた。78才。故人の遺志で、遺体は無宗教・無儀式で順天堂病院に、学術解剖のため引取られ、骨ひとつのこさない簡素さで、生前主張の通りこの地上から消えた。・・・

Ⓨ **7月30日**。午後。山鹿さんはベッドに、すっかりやせて小さくよこたわっておられた。言葉はもうほとんど聞きとれず、半分は推量で、「・・・ですか」と問いかえすとうなずかれるのだった。こちらからの話は、よくわかられたが、応えのない会話はとぎれ勝ちで、どうしようもない思いで宙をとんだ。右手だけが、ほんのすこしきく。それを大きくうごかす。体を左へ傾むけてほしいという合図とわかった。「こう・・ですか」 二〜三分して戻す。それをくりかえし求められた。(10年の間、病床にありながら、褥瘡がなかったのは、看護もさりながら、この山鹿さんの細かい気くばり一体をうごかすことにあったのだろう。) 手を差し入れると、腰の下が汗ばんでぬれていた。その生あたたかい湿り気が指先きに沁みとおるようだった。肌着の着がえをした。抱きあげると、思いのほか重かった。一死んだ妻のあの軽さをその時まで何となく考えていて、びっくりした。それから、こんな重さならまだ・・・と思った。

おわかれのあいさつに手をにぎると、思いがけぬ強い握りかえしが来た。のぞきこんだぼくの眼をとらえて、まばたきもせず、じいっと放さない。叱られ詰問されるようだった。 表へ出ると、もうこれで生きておあいできぬかもしれない、と思った。顔を空にむけて、よっぱらいのように、よろめき歩いた。

Ⓨ 11月23日。玉川信明さんを一しょに、おたずねした。たそがれ日記を編集し、若干の解説や評伝をつけて、上梓先をさがし、本にする、そのお許しを得るためであった。病状は7月とあまり変りなかった。むしろ、こちらが要件をいったり、質問すると、はっきり是非を表明された。「祖先は山鹿素行だということを聞いたことがありますが・・?」というと、奥さんの横からの説明に、強く眼をふって「デタラメダ」と云われた。「中国の大同党へは入党されたのですか?」「入党した」・・・

夕刻までの数時間、いまからおもえば、この世で最後の出会いとなったひとときを一丁度来ておられた長女、アイノさんをまじえて一うかうかと過したのだった。

Ⓨ 山鹿さんの生涯は、何よりもエスペラントとアナキズムの二つの運動を、不可分一体のものとしてその全身に具現したものだった。 エスペラントとアナキズムがこのように全生涯を賭けて切実に結びつき展開されたものを、ぼくらは世界のどこにもみることはできない。

Ⓨ 山鹿さんは、明治40年春、家を出て上京、出版社の有楽社にたよった。たまたま有楽社は、創立まもない日本エスペラント協会(JEA)事務所があり、社内講習会でエス語をまなんだ。そしてすぐJEAの無給書記として働きはじめることとなった。山鹿さんの生涯は、ある意味で日本エスペラント運動のはじめから始まるひとつの歴史であった。

Ⓨ 大逆事件直后の明治44年5月、山鹿さんはJEA会員名簿から住所をさがして大杉栄に手紙を出し、そして密会した。以来、彼はアナキズム運動にすべてを投げうってとびこんだ。日本のアナキズム運動が、国際的交流と連帯をつねに保ちえた、その中心の働きの中に、つねに山鹿さんはいた。(山鹿さんが国際的にどの位しられているか!たとえば一度海外へいってきた者は誰でもその大きさにおどろく) とくに中国への何度も出かけていった、日中アナ交流の仕事は、山鹿さんあってのことだった。(大杉の国際アナ大会出席の旅券入手は、山鹿さんが渡支して工作したのは有名ど。)

Ⓨ 印度でWRI(戦争抵抗者インター)世界大会があった。それに出席して帰日した一九六一年12月脳出血で半身不随となられた。以降、筆のとれる一九六六年まで、何井の請いにより「たそがれ日記」をかきつづけられた。 日記は、全八冊、すべて九一篇、自伝追想、記録、論説主張、随想そして中国、台湾、比国印度にわたり、アナキズム運動史、エスペラント運動史にとっても、貴重な資料の宝庫でもある。

Ⓨ 云うことがいっぱいで、まとまらない。思いつくままに一。次号イオムで、改めてかきたい。山鹿さんの偉大な生涯を、未知の人に伝えるのは、僕の役目だと思う。

Ⓨ 毎月一回、当分の間上京して山鹿さんのこしたものの整理と目録つくりをやるつもりでいる。